

CASE PRESENTATION

Dentist

Technician

Hygienist

ルシェロ歯ブラシの新しいシリーズ B-20“ピセラ”の特徴と 効果的な臨床応用



東京都 景山歯科医院
歯科衛生士
飯田しのぶ

はじめに

私は今まで患者さん自身でプラークが落とせるように、口腔内や歯の状態に合わせてブラッシング指導を行ってきた。そのため、ブラッシング技術の定着まで時間がかかることがあり、患者さんに負担を強いられる場合も多かったと思っている。しかし、ルシェロ歯ブラシを取り入れたことにより、歯科衛生士である私が、歯肉の状態、プラークの状態、患者さんの好みやブラッシングの癖などを考え、その患者さんに合った歯ブラシを選択することができるようになった。選択した歯ブラシを薦めることで、患者さんが簡単に磨

け、負担も減るのではないかと考えている。

ルシェロ歯ブラシは、“Basic”“Perio”“Operation”と3つの形態で5種類のブラシが発売されてきたが、ブラシを選択するとき、口腔内の状態によっては適切な歯ブラシを決めかねることもある。特に、若年者に適した、歯ブラシの選択は難しく感じていた。若年者の口腔内は、う蝕予防だけでなく、歯肉炎の予防が必要な時期だが、乳歯から永久歯に交換が終了していても、歯は萌出の途中であり、歯冠長が低いことが特徴である。そのため舌側や口蓋側の歯間部や歯

頸部は磨きにくく、ルシェロB-10やP-10を用いても、ブラシのヘッドが大きく、毛も長いことためふらついてしまい安定しないことが問題だった。

今回発売されたピセラ(ルシェロB-20)は、ヘッドやハンドルの長さなどその特徴から、磨いたときに安定感があり、10代の若年者やお口の小さい女性だけでなく、小児や高齢者まで、今までルシェロ歯ブラシが使いにくいと感じていた患者さんに対しても薦めやすくなったと感じている。そこで今回は、ピセラの特徴と実際の症例を紹介する。

B-20“ピセラ”の特徴

ピセラ歯ブラシは、B-10やP-10に比べて、植毛部の長さや毛の長さが短く、ヘッドの小さい4列植毛が特徴である。一見幅広く感じてしまうが、この短めの4列植毛が、歯面に当たったときの安定感を生み、若年者だけでなく舌側歯頸部のブラッシングが苦手な患者さんや混合歯列期の小児が、磨きやすいと感じる理由になっていると思う。

また、植毛部先端のタフト部がB-10よりも長くなっており、最後臼歯遠心部や萌出中でまだ低位の咬合面、叢生部のように凹凸のある部位に届きやすくなっている。

ハンドルは従来のルシェロより短く、手の小さな成人女性や若年者に持ちやすく設計されている。またペングリップ、バームグリップのどちらの持ち方でも、手にフィットする。歯間部の清掃が不十分であるため、ルシェロを薦めても、ハンドルの持ちにくさから、ルシェロを敬遠される方がいたのだが、ピセラは自然に持つことができるため、プラークコントロールの上達につながっている。

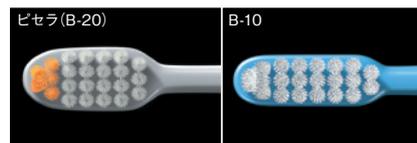
毛の硬さは、ピセラMがB-10Sと同じ

6milの太さだが、長さが短いためB-10Sより硬く感じる。今まで、B-10Mでは歯肉に対して硬すぎるがB-10Sではプラークがなかなか落とせないというタイプの患者さんにとって薦めやすい硬さといえるだろう。また、ブラシ圧のコントロールが苦手な若年者が、小児用のミディアムタイプ歯ブラシで歯頸部を磨くと、力を入れすぎて歯肉を傷つけてしまうことが多く、ソフトタイプでは、プラークが落とすきれいなため舌側や歯間部の清

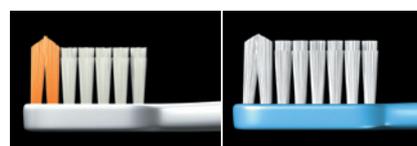
掃が不十分になりがちだったが、ピセラMは最適な硬さであると感じている。

ピセラSはP-10Sと同じ5milの太さだが、P-10Sのようなテーパー加工ではなく、毛の長さも短いことから、軟らかいがコシのあるプラークの落としやすい硬さのブラシである。そのため、軟らかい歯ブラシを好む方や永久歯萌出時などのブラッシング時に痛みのある患者さんに薦めやすい歯ブラシである。

ピセラ(B-20)とB-10の比較



ピセラは4列植毛で幅が広いが、ハンドルとのバランスがよく、歯面に当たったときの安定感が優れている。



ピセラは、先端にあるタフト部がB-10に比べて1mm長いので、歯列や歯面の凹凸部に届きやすい。



ピセラはB-10に比べ、ハンドルが短くやや太めなため、どのような持ち方でも安定して自然に持つことができる。



ピセラM(B-20M)の硬さはB-10MとB-10Sの中間に位置し、ピセラS(B-20S)がB-10SとP-10Sの中間の硬さの使用感がある。

症例1 若年者の歯冠長が低い舌側や口蓋側にピセラMを使用したケース／11歳女性



1-1 舌側のブラッシングが苦手で、ブラシが上手に当てられない。歯冠長が低く、歯頸部や歯間部に磨き残しがみられる。ピセラMを使用してもらおう。



1-2 舌側は、咬合面を磨いた後に、ブラシを斜めに舌側に傾けることで、歯頸部にブラシが到達する。



1-3 歯ブラシは歯頸部に当たり、歯間部まで歯ブラシが届いていることがわかる。



1-4 前歯部舌側はシャベル状に凹んでいるため、プラークは溜まりやすく、歯ブラシの毛先は凹みに届きにくい。



1-5 ブラシの先端部をへこみに当てる。歯ブラシは斜めに隣在歯に当てることでヘッドの安定を保つことができる。



1-6 凹み内部のプラークが簡単に除去できている。

症例2 歯の萌出中の状態に合わせてピセラSからMに歯ブラシを変更したケース／11歳女性



2-1 上顎第2大臼歯の左右ともに咬頭が萌出した状態。歯肉には炎症がみられる。



2-2 歯肉弁がかぶり、歯ブラシが当たると疼痛があるため十分に磨けていなかった。



2-3 ピセラSを使用してもらおう。先端のタフト部を当てても痛みがないため磨きやすい。



2-4 3ヶ月後来院時。左右ともに咬合面の萌出は終了し、歯肉の炎症は消失している。



2-5 第2大臼歯はまだ低位なため、プラークが多く付着している。また、プラークが硬く、ピセラSでは落としきれない



2-6 歯ブラシをピセラMに交換し磨いてもらう。萌出中の咬合面だけでなく、口蓋側プラークも磨けている。

症例3 ブラッシング時に疼痛があるためピセラSを使用している永久歯萌出中のケース/12歳女性



3-1 第1小臼歯が萌出中。永久歯への交換が遅く、まだ乳歯も多く残存している。



3-2 歯ブラシは小児用の平切りのソフトタイプを使用していたが、萌出中の部位は痛みがあり、十分に磨けない。



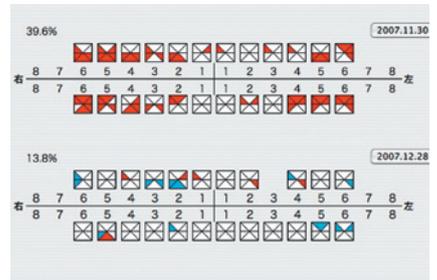
3-3 ピセラSを使用して萌出中の第1小臼歯を磨く練習を行う。痛みはなく歯ブラシが当てられた。



3-4 1ヶ月後の来院時の状態。まだ萌出が続いており、歯肉には炎症がみられる。



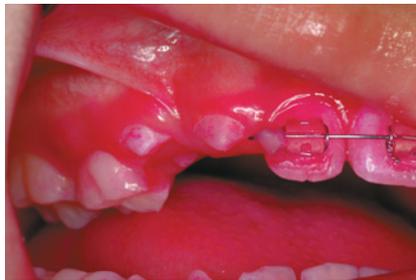
3-5 歯ブラシはピセラSを継続して使用しており、染め出して確認するとプラーク量は減少している。



3-6 1ヶ月前の来院時と、PCRを比較してみる。萌出中の部位だけでなく、全体的にプラーク量が減少したことがわかる。
※1回目:赤。2回目:水色。



3-7 染め出されたところを磨いてもらうと、ブラッシングも上達しており、プラークが軟らかいため、ピセラSで磨くと簡単に落とせている。



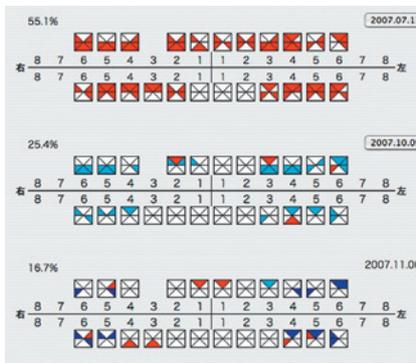
4-1 プラークが硬く落としにくいいため、萌出中であったが、ピセラMを使用してもらう。



4-2 先端のタフト部は矯正のブラケットの周りを磨くことにも適している。



4-3 ブラッシング時の痛みがなく、ブラークもしっかり落とせている。歯ブラシの選択は、歯肉とプラークの状態を考慮して選択することが大切である。



4-4 ブラッシングが苦手なプラークが多かったが2007年7月の来院時からピセラMを使用するようになり、プラークは減少してきている。
※1回目:赤。2回目:水色。3回目:青。

症例5 ブラッシングが苦手なためピセラMを使用した小児のケース／9歳女児



5-1 ブラッシングが苦手で、口呼吸もあり、プラークが硬く磨いてもなかなかきれいに落とせない。



5-2 第1大臼歯咬合面や前歯舌側にもプラークは多量に付着している。



5-3 ピセラMを使用してもらくと、短時間でプラークを落とすことができた。

症例6 歯ブラシの選択が難しかった成人男性にピセラMを使用したケース／24歳男性



5-4 咬合面裂溝のプラークも先端のタフト部が当たりきれいに磨けている。



6-1 歯は歯冠長が低く、歯肉は柔らかいため、B-10Mでは擦過傷を作ってしまうが、B-10Sではプラークが硬く、歯磨きに時間がかかっていた。



6-2 前歯部には叢生があり、プラークが落としにくく、歯石の沈着が起こりやすい。



6-3 ピセラMを使用し、先端のタフト部を叢生部に当てて磨いてもらう。



6-4 ブラシの先端が届きやすくプラークが落ちている。



6-5 少量の磨き残しはみられるが、短時間のブラッシングでプラークを除去することができた。

症例7 不適合修復物のマージン部とボンテック部に対して、B-10MとピセラMを比較したケース／66歳女性



7-1 不適合な修復物のマージン部に対して、B-10Mを使用するとペンダグリップでは持ちにくく、ヘッドは大きすぎて、歯頸部に歯ブラシが当てにくかった。



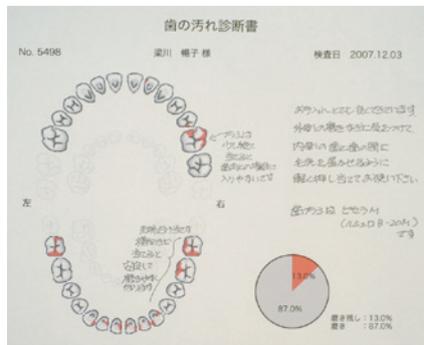
7-2 歯ブラシは先端のタフト部だけでなく、毛先全体を当てて安定するように磨いてもらう。



7-3 ボンテック部には歯ブラシを立てて先端タフト部を挿入する。



7-4 ブラッシング後の状態。苦手な右下舌側をラクに磨くことができた。



7-5 ホームケアに役立ててもらうため、使用中の歯ブラシ名やブラッシング指導時のアドバイスを、プリントに記入し患者さんに渡している。

症例8 最後臼歯頬側に対してB-10SとピセラMの磨きやすさを比較したケース/74歳女性



8-1 8はカリエスがあるが、歯根が肥大しており抜歯が難しく、角化歯肉幅が狭いため、充填処置も難しい。



8-2 最後臼歯遠心にはワンタフトブラシを併用しているが、頬側は歯ブラシが届きにくく、プラークの除去が難しい。



8-3 ルシェロB-10Sを用いて、歯頸部に当てているが、十分に到達しない。補助器具として、ワンタフトブラシを併用している。



8-4 ピセラMを同じ部位に使用してもらう。先端のタフト部が遠心に届きやすく、植毛が短いため、頬側も磨きやすい。



8-5 ワンタフトブラシを用いなくても、78の頬側や遠心のプラークが除去できている。

症例9 歯周治療後のメンテナンス中に平切り軟毛ブラシとピセラSを比較したケース/60歳女性



9-1 軟毛の平切り歯ブラシを使用しているが、叢生のある前歯部は毛先の当て分けが苦手でプラークが残りやすい。



9-2 使用中の軟毛ブラシと同じ毛の太さ(5mil)のピセラSを使用する。先端のタフト部と段差植毛により、毛先は歯間部に届いている。



9-3 歯間部のプラークは簡単に落とすことができた。口腔が小さく、小児用では物足りなかった患者さんにとって磨きやすく、ピセラSは適している。

まとめ

患者さんの口腔内はさまざまなので、その口腔内にあった歯ブラシを見つけるためには、多くの歯ブラシの特徴を知っておく必要がある。私は以前、歯ブラシはどんなものでもプラークが除去できればよいと考えていた。確かに口腔内に詳しい歯科衛生士であれば、市販の歯ブラシでも、どのような形態の歯ブラシでも歯の形状に合わせて、プラークを除去できると思う。しかし、患者さんは違う。

ルシェロ歯ブラシを導入したことで、患者さんは難しい方法を習得するのではなく、短時間で、楽に簡単な歯磨きができることを求めていると感じた。口腔衛生の専門家である歯科衛生士が患者さんに合った歯ブラシを薦めたことで、患者さんが磨きやすいと思い、口腔内が改善され、健康維持に効果があることを体験すると、担当歯科衛生士の信頼度はアップする。

歯科衛生士の仕事はブラッシング指導だけではないが、基本的な口腔衛生指導で患者さんの信頼を得ることは、口腔の健康を守るすべての業務につながるのだと考えている。歯ブラシだけでなく、これからも次々と登場する、新しい口腔衛生用品に対し、専門家の目で評価し、患者さんの側に立った新しい情報を発信していきたいと思う。